

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、本文には一部省略したり、字句を改めたりしたところがあります。

① えんぴつとは何か(いま私は、えんぴつでこの文章を書いているのでえんぴつを例にあげましたが、これは何でもよいのです)。

こう聞かれたら、^(ア)「シシヨ」に書いてあるように、「^(イ)黒鉛と粘土の粉末のコンゴウ物を高熱で焼いて作った芯に、木の軸をはめて作る筆記用具」などと言うより、「これだよ」と実物を見せるほうが早いですね。初めてえんぴつを見た人には、書き方や削り方を教えてあげることも大切でしょう。

それでは、^(ウ)「いのちとは何か」と聞かれたらどうしたらよいでしょう。これだよと言って見せることができるでしょうか。いのちはどこにあるのでしょうか。じつは、改めて「いのちとは何か」などと聞かれなければ、何となくそれがどこにあるかは誰でも知っています。そう、生きものがいればいのちはある。そう思っていますね。

私たちの祖先は、食べものを手に入れるために狩りをしました。すばやく走っていくシカに矢じりを投げ、命中すればバツタリたおれます。もう動かない。近寄って見ると、大きさも形も元のままです。^(エ)「1」さっきまで「生きている状態」にあったシカが「生きていない状態(別の言い方をすればなら死んだ状態)」になっているのが分かります。「生きている時」と「生きていない時」ではどこが違うんだろう。昔の人は、「生きている時には、いのちがあつたのに、死んだらそれがどこかへ消えてしまった」と考えました。いったいそれは何だろう。

② ^(ア)とにかく、「いのちを知るには、生きものを調べてみればよい」ということは分かります。そこで、人間の体のはたらきを調べる研究が進みました。その中で、十七世紀の医師、ウィリアム・ハーヴィが、心臓というポンプが送り出した血液が動脈を通じて体中を回ったあと、^(ウ)「静脈を通じてまた心臓に返ってくる」ということを見つけました。血液 ^(イ)「A」論といわれます。なんだか自動車のエンジンのような感じがしませんか。一方で、体をつくっている部品、^(エ)「2」筋肉や皮膚なども調べられました。こうして、人間の体も、機械のように、部品があり、それぞれがはたらくことで「生きている」のだという考え方が強くなってきました。哲学者のルネ・デカルトがハーヴィの研究に注目して、人間機械論という考え方を出したのは有名です。

③ えっ、人間って機械なの？ デカルトの頃は、とても精巧な機械の代表は時計でした。そこで、時計と人間を比べて考えてみたのです。コチコチ正確に動くところは似ているようでもあり、似ていないようでもありますね。たしかに人間の体は機械のように動いていると考えられる面もあるけれど、^(イ)「私たちに「心」がある。ここは機械と違うのではないだろうか。多くの人がいだいた疑問です。

④ ここで、科学が登場します。そして、科学(生きものについて考える科学を生物学といいます)は、「いのちとか心とか呼ぶべきものはあるのだからけれど、それは、ここにいのちがありますよとか、心がありますよ」といって特別にとり出せるものではなく、生きものが生きていることといっしょにあ

る。いのちについて知りたかったら、生きものって何だろう、生きているってどういうことだろうという問題を考える必要がある」という立場をとって研究を続けています。

⑤ ^(エ)そして現在は、科学のセイヤを利用した科学技術が生活の中に入りこんでいます。それだけでなく、科学技術は私たちの暮らし方や考え方を支配するようになっていきます。携帯電話はとても便利ですが、メールだと面と向かつては言えないことも言えてしまうために、人間関係がこじれたなどという話も聞きます。科学技術は人間が作ったもののはずなのに、なんだか人間のほうがふりまわされてしまうのは問題でしょう。携帯電話と友だちとどっちが大事か。現代社会で、いのち、つまり生きることを考えるとこのような問題も出てきます。ですから、科学技術文明の基盤になっている科学は、生きることをどのようにとらえているかと考えるのは大事です。

⑥ まず、機械と生きものが違うところを見ていきましょう。有名な物理学者であるハイゼンベルグがおもしろい例をあげています。彼はその時、船に乗っていました。「もし今、この船とクジラがぶつかって、船の一部がこわれ、クジラもけがをしたとしよう。船は誰かがおさなければならぬけれど、クジラの傷は自然になおってしまう」。機械は誰かがセツケイをし、部品を集めて作るのですが、生きものは生まれて、だんだん育っていくものです。途中で少々のががあつても自分でなおします。私たちは、両親がいるからこそ生まれたのであって、何もないところから出てきたわけではありません。蚊やハエなどはわいてくるといって、きたないものがあるとそこから出てきたと考えていた時代もありました。けれども、十九世紀にフランスのパスツールが、消毒をした肉汁に外からバクテリアが入らない工夫をしたら、何日たっても腐らない、^(イ)「3」腐敗の原因になるバクテリアは生まれてこないことを証明しました。「生きものは生きものからしか生まれない」。少なくとも、いま私たちの身のまわりにいる生きものについては、生きものは生きものからしか生まれないというきまりが成り立ちます。

あなたももちろん生きものです。あなたは誰かが作ったものではなく、生きものとして生まれ、自分で生きていく存在です。これを少しむずかしい言葉では「自律」といいます。生きるということとは、誰かに動かされるのではなく、自分で自分を作っていくことなのです。こうして生きていく時、あなたはあなたの「いのちを大切にしている」といってよいでしょう。このとき大事なことは、他の人、それだけでなくすべての生きものは自律して生きているのであり、それも大切にしなければならぬということです。

(「いのちってなんだろう」中村桂子)

問一 部(ア) (オ) のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

問二 部1～3にはどんなことばが入るか、最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返して使ってはいけません。

ア でも イ ただし ウ また エ つまり オ たたとえば

問三 部「たしかに」がかかっていく部分として最も適切なものを、……部(a) (d)の中から選び、記号で答えなさい。

問四 次の段落を補うのに最も適切なところを文中の㉑～㉔の中から選び、記号で答えなさい。

もちろん科学だけが正しいものの見方とはいえません。でも、十七世紀以来、科学は次々と新しい発見をし、新しいものの見方を出してきました。

問五 部①「えんぴつとは何か」、部②「いのちとは何か」とあるが、これらの問いかけによって筆者はどのようなことを示そうとしているのか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「えんぴつ」のように、その作り方をすぐに伝えられるものもあるのに対し、「いのち」のように、その生まれ方を理解しにくいものもある、ということ。

イ 「えんぴつ」のように、大した価値をもっていないものもあるが、「いのち」のように、なかなかその大切さを表現しにくいものもある、ということ。

ウ 「えんぴつ」のように、その存在をわかりやすく認識できるものもあるが、「いのち」のように、そのあり方をとらえにくいものもある、ということ。

エ 「えんぴつ」のように、その使い方を楽に教えられるものもあるのに対し、「いのち」のように、そのあつかい方を説明しにくいものもある、ということ。

問六 たとえば原始時代の人々は「いのち」をどのようなものとしてとらえていたのか、本文の内容をふまえて答えなさい。

問七 部Aにはどんなことばが入るか、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 循環 イ 流動 ウ 再生 エ 排出

問八 部③「科学技術」とあるが、これは現代の人間にとってどのようなものになっているか、本文中のことばを用いてわかりやすく説明しなさい。

問九 本文中に挙げられている機械と人間の違いについて、重要な点を次のように三つにまとめました。次の部X～Zに入ることをそれぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

・機械にはXがないが、人間にはXがある。

・機械にはYがないが、人間にはYがある。

・機械はZしていないが、人間はZしている。

問十 本文では「いのち」についての筆者の考えが述べられていますが、あなたはどのようなときに「いのち」を実感しましたか、その経験を挙げ、「いのち」について思ったことを二百字以内で書きなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「漁火」は四国の小さな町である。「ナツミ」は、半年前にそこに家族と移り住んだ小学五年生で、「カナエ」は、ある事情から家族と離れ、「ハマヤン」の家でお世話になっている中学一年生である。二人が通っている「漁火分校」は、小学生六人と中学生三人の小中併設校で、授業は別々だが、行事や課外授業は、小中合同で行われる。

波もおだやかになった数日後、漁火の海に定置網が無事設置された。

村の生活にかかわる大仕事が終わわり、みんながホッとしたのもつかのま、ハマヤン家のおばあちゃんが亡くなった。

風邪をこじらせてのとつぜんのことだった。

「ハマバアチャンらしい最期じよ。いそがしいみんなの」1がすくのを、まるで待つとつたみたいにしてな……」

村の人たちはそう言って涙をぬぐった。漁師のおっちゃんたちはこつい顔を涙でぐしょぐしょにして、子どものようにおんおんと声をあげた。

「うちの子らは漁火の海のアワビやサザエが養うてくれたんじよ」

漁火一とうたわれたカツギの名人ハマバアチャンの口癖だった。同じようにして育てられた漁師のおっちゃんたちには、自分の母親や祖母にかさなる深い思いがあるのだった。

魚の包丁さばきや祭りのちらし寿司、わらぞうり編み、ヒジキ作り……、分校の子どもたちもハマバアチャンに教わるが多かった。

① ことにカナエの悲しみようは、思いもよらないはげしさだった。焼き場の長い煙突から細く煙がたなびくと、地べたをかきむしり、身をよじって泣き叫ぶ。なぐさめようもなく、ハマヤンのおかみさんがカナエに折りかさなるようにして、ただただ泣きくずれた。

次の週、朝の全校集会であらためてハマバアチャンを追悼した。

「ハマバアチャンはわたしたちにいっぱい思い出をのこしてってくれました。だからこれから先もずっとハマバアチャンのぶんも、みんなで強く生きていきましょう……」

そして校長センセは、この地方に伝わる「阿波のいただきさん」と呼ばれた女の人たちの歴史を語ってくれた。

「山と海に閉ざされて陸の孤島といわれた漁火の地。でもここに住む人たちは、ずっとずっと遠い昔から、理想のふるさととして、夢をつないで生きてきたのです……」

辺境のゆき止まりの奥地だからこそつくりだせる海産物の、めずらしくて独自の商品化。その販路をもとめて、男衆の漕ぐノージ船で四国はもとより遠く海をわたり近畿や中国地方の港から港へ、町から町へとひろく売り歩いたという。

かすりの着物にまえかけ姿、手甲脚絆に姉さまかむり。塩ものと呼ばれる海産物を入れたおおきな竹カゴを頭にいただく「阿波のいただきさん」の行商姿……。大正時代という春と夏にわたるその正装写真をくばられて、みんなの口から声もれる。

— 5 —

「わあ、ステキ！ きれいな人……」

「どこん家の人なんだろう……」

ささやく声に、エヘン、エヘンとさかんにリュウジがアピールする。

「リュウジくんのお祖母ちゃん……、てこと、ないよねえ」

「それだけは、ありえない」

② イスが鳴ってリュウジがずっこけている。

「こうしていただきさんたちによる広い世間との交流や情報の交換などで、つねに新しい考えや、開いた気持ちで、なにことでも自分たちの手できりひらく、そんな強い生き方が伝統としてのこされてきたのです……」

なにか深く感じているみたい、となりにいるカナエの手がこぶしをぎゅっとかたくにぎりしめている。

ナツミはナツミで、これまで気になっていたあれやこれやのことを考えていた。

祭りの奉納相撲で対戦相手のおかみさんから逃げて、遠く堤防の先で子犬のようにふるえていたクロアニヤン。

おかみさんが手に入れた景品のバケツや洗剤の箱を両手にかかえてニワトリのように首うなだれて

おかみさんのうしろをトコトコと帰る、その日運動会で帝王のようにふるまっていたあのダルマ船長

……。

いつも陽気でガラッパチ、むこう意気の強い漁火のおっちゃんたちが、おかみさんの前では、そろ

いもそろって死んだふり、ちいさくコトンとちぢこまる。

③ それらの不可解だったちいさな謎が、いま校長センセの話を聞いて、きれいさっぱり解きほぐれた

のだった。

「わしら漁火の漁師仲間だよ、シケの海には乗りだしても、かあちゃんにタテック、そんな無鉄砲な

やつはおらんわな」

「なんちゃ、ああだこうだ言ってもよ、しよせんわしらはかあちゃんの手ひらのうえのママゴトぞ」

集まればなにかといつては宴会となり、漁火のおっちゃんたちがその席で興にのつてもらす冗談話

……。

（なあーんだ、あれって、ゼーんぶ、マジだったんだ！）

「……交通手段などの発達で、阿波のいただきさんの風習こそなくなりました。でも、それは、

漁火魂としていまもみんなの心の内に熱く受けつがれているのです……」

④ カナエが校長センセのことばに静かにうなずき、阿波のいただきさんの資料写真をちいさくた

たみ、胸のポケットにしのばせた。

⑤ 「ドコイッタも旅先から駆けつけてくれてよ……。うちのバアチャンも、なんぼかうれしかったと

思うんじよ……」

⑥ 「ポチポチにそう言われると、なんだかニヤア……。たまたまハマバアチャンのちらし寿司を夢にみ

てニヤア……」

「オイラも夢枕にたつて呼ばれたんだワン。^⑦ ハナシガイ、ポチポチといっしょに食っていけつてな……」

「うちのバアチャン、わけへだてなく誰にだつてやさしかったけん……」

ポチポチのことばにハナシガイとドコイツタがおおきくうなずく。

先日の強い風で、かぞえるほどの実をのこしてすっかり葉をおとした柿の木。その根かたに、木漏れ陽をあびてつややかな粒をつけたムラサキシキブがひっそりとある。

ハマヤン家の庭先に、猫と二匹の犬とがよりそうように寝そべって、石垣のあいだにのぞく沖合いの海をながめているのだった。

「ところで、カナエのことだけどニヤア、あれからどうしてるかニヤア？」

「それなんだワンワ。ほんやりしたり落ちこんだり、ハマヤン夫婦も心配してよ、夜も川の字に布団並べて寝てるみたいだワンワ」

するとハナシガイが思い出したように顔をあげた。

「そういえば、祭りの日、ちよいと気になることがあったワン」

ハナシガイが防波堤のはずれでのんびりと紅白のまんじゅうにかじりついているところへ、カナエ母子が来たらしい。カナエが思いつめたようにしてなにやら訴えるのへ、

「オイラの耳に勝手にとびこんできたんだワン、母ちゃんの声が。パパが忙しいのは知ってるでしょ！ ママだつて受験をひかえたお兄ちゃんのことです手いっぱい。たいへんな思いをして来てあげたんだから……」

オクターブ高く言って、ハナシガイが咳きこんだ。

「ふつう、言うか？ そこまでニヤア」

「カナエの父ちゃんは、ちょっとした病院を経営するお医者さんらしいワンワ。医者のお娘がこんなことから、わたしのことがじゃまなんだろうって、昨夜も泣きじゃくってハマヤンたちを困らせていたんだワンワ……」

ハナシガイがとぜん立ちあがって、ブルブルツと体をふるい、それから三つ、おおきく吠えた。

「たまらんワン。子犬のころを思い出す。オイラ自動車とジコつてよ。痛めた足がみつともないって、公園のすみにすてられたんだワン……」

いまも不自由なうしろ足をかばって、ハナシガイは遠く海を見やるのだった。

こうこうと、ぼつかりと宙にうかんで月がある。

海面いっばいに照りかえし波に散乱する光の粒のきらめきは、万華鏡の世界へ迷いこんだようだった。

「なんだか、海のむこうまで歩けそう」

「うん、踊りたいって感じよね」

気晴らしにとイカ釣りに誘われて、ナツミとカナエはハマヤンの漁船のうえでゆられている。

イカは短い竿でしゃくるようにして釣りあげる。

疑似餌にいくつ足をからませたのを、手早くはずしてイケスに放る。

月の夜の夕暮れどきから二時間ぐらいが潮時なんだとハマヤンが言ったとおり、船のイケスには、もうかぞえきれないアオリイカが泳いでいた。

竿のしゃくりに微妙なコツがあるらしく、ふたりは「あれ？」だの「きゃっ」だの、にぎやかに声はあげても、イカの一匹もあがってこない。

陽がおちて暗くなっても釣れないふたりのために、集魚灯が灯された。

明あかと海面を照らし、イカをよせあつめる。

そのうち、まぐれか、竿さばきもおおげさに糸をたぐるカナエにナツミも手をかして、ようやくのこと一匹を釣りあげた。

「イカの墨吹きに、気をつけよ！」

ハマヤンがそう言ったときには、すでにふたりのピンクと白いシャツは、ちらし墨の花火のように染めあがっていた。

「イカの墨は落ちんぞ……」

ハマヤンに言われて、

「2」

ふたりは手を取りあつてよろこんでいる。

いま釣りあげたイカが船底に横たわり、せわしくエラを波うたせている。

「海のなかを泳いでいるみたい……」

「空をとんでるみたい……」

同時に言つてふたりは顔を見あわせた。

イカの赤茶けて黒くこげた体色が、みるみる闇をはらって透きとおる。そして、透けた表皮のむこうにほんやりとかげりがわきて、そのなかに青く、赤く、無数の光の粒がまたいたっていた。

それはまるでふたりの呼吸とあわせるように、ゆらぎながらふうわりと消え、さまざまに模様を描いてはわきあがってくる。

「星座みたい……」

「オーロラみたい……」

ふたりして、やつぱり同時につぶやいた。

「今夜は、こんなところで、しまいにしよか」

ハマヤンが竿をねかせて、タバコに火をつけた。

ナツミもカナエと並んで腰をおろす。

集魚灯が消されて、あたりは月明かりのぼうぼうとした青い闇。

遠く近いさり火がまたいたっている。

「なんか、夢のなかって感じだね……」

「つていうか、宇宙にぼっかりいるみたい……」

ナツミとカナエがおおきくおおきく息を吸う。

月のまわりにうつすらと白いレースのような雲がたなびいていた。

「こんなしよるんが、いっちゃん、ええのオ」

ハマヤンの口から細く長く煙がこぼれた。
波がひとつおおしく船をゆさぶる。

前後のゆれが左右に伝わり、船はナツミたちの体にちいさく円を描かせ、やがてまた 3 たゆ
たっている。

「わたし……」

カナエが言いかけて口ごもった。

ハマヤンの口から流れる煙が、月明かりにふわりととけて消えていく。

「まだ、いてもいいの？」

カナエが唐突に言った。

「ハマヤンの家に、まだいてもいいの？」

「あたりまえじゃ。カナエが好きならだけおればええ。わしらにそんな気がねしとるんか」

「だって……。あの日、寒かったのに。おばあちゃんを散歩につれだして……。それで……」

「馬鹿を言うんでない！」

みなを言わずに、ハマヤンが強く言った。

「バアチャンは、たまたま風邪をこじらせたんじゃない。だれのせいでもない。寿命じゅめいというもんぞ」

「だって、わたしのお祖母ちゃんだって、わたしのせいで……」

カナエが訴えるようにハマヤンを見あげた。

「受験をしくじって、それで、病気だったお祖母ちゃんが……。だから……」

「なんちゅうことを言う。かわいい孫によ、そんなん思われよったら、カナエのお祖母ちゃん、この
先ずっと、うかばれへんぞ」

「だって、だって……」

カナエは息を乱し、

「ママはわたしのせいだって……」

言ってわっとつ伏した。

うめき声をあげて泣くカナエの背をさすりながら、ナツミは声もなかった。

「そうやったんか……。つらかったのオ、自分ひとりで背負しよいこんで……」

ハマヤンはおだやかな口調で言い、タバコの火を船底にねじりつぶした。

「カナエの母ちゃん、疲れとったんや。お祖母ちゃんの看病やなんやらでよ」

船べりを打つ波の音がしていた。

「忙しさに追われると、なんちゃ、ことばまで生き急ぎよる。思いもせんことまで勝手に口からとび
だすんよ……」

カナエが涙をぬぐって聞き入っている。

「そんなして、知らんまに人の心を傷つけてしまうこともあるんよ。かなしいのオ……」

「ハマヤンみたいに、やさしい人でも？」

ナツミが思わず聞きかえした。

「じゃけん、こうして漁に出るたび、海から説教くらうんぞ。心を強うに生きろ、人としてのおだや

かさを知れ、そんなしてガミガミと……」

「わたしも海のお説教、聞きたいな」

「おう、いつだって乗せちやるけん」

ナツミにはほえんで、ハマヤンはイケスからとりだしたイカに包丁を入れる。

「カナエの父ちゃんや母ちゃんにも、そのうち海の説教をたっぷり聞かせてやるけん。ずしりと骨
身にしみるよう、シケの海につれだしてな」

クスツとちいさく声がして、カナエの笑顔が月明かりにうかぶ。

「カヌーに乗ってたとき、……。なんか、そんな……」

「説教くらいよったか。そうか、そうか、カナエも海の子になったってか」

てぎわよくさばいたイカそうめんをふたりにすすめて、

「バアチャンのぶんも、たっぷり食ってやれ。大好物じゃったけん」

ハマヤンがツルツルと口いっぱいにほおばってみせた。

「カナエのこと、天からさずかった孫娘だつてよ。うれしいな、幸せだつて。齒のない口で、どんぶ
り山盛りツルツルつてな……」

⑧ カナエは、うなずき、うなずき、涙のイカそうめんをすすった。

（『漁火 海の学校』梅田俊作）

問一 ☐ 部1に入る身体の一部を表すことばとして最も適切なものを漢字一字で答えなさい。

問二 ~~~~~ 部 (a) 「無鉄砲な」・(b) 「興にのって」の本文中での意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

(a) 「無鉄砲な」

ア どんなささいなことであっても見のがさないようす。

イ どんな場合でも決してはむかおうとしないようす。

ウ ものごとのよい悪いを見分ける力がないようす。

エ 結果を考えないでむやみにものごとをするようす。

(b) 「興にのって」

ア おもしろさにひかれ、その場のいきおいにまかせてそれをしていたい気分になって。

イ 強い疑問をいだいて、すすんでそれを人に話さずにはいられない気分になって。

ウ わざと気持ちを高ぶらせて、いやなことでも話してみようとする気分になって。

エ 周囲が望んでいることを察し、自分がそれを見せてやろうという気分になって。

問三 ——— 部①「ことにカナエの悲しみようは、思いもよらないはげしさだった」とあるが、それはなぜか、本文全体を読んで、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 血のつながらない自分のことを「ハマバアチャン」はまるで本当の孫のようにかわいがってくれたのに、一言もお礼のことばを伝えられないまま別れることになってしまったから。

イ 自分が心配をかけたせいで「お祖母ちゃん」を死なせてしまったという思いをかかえていた上に、「ハマバアチャン」が亡くなる原因も自分が作ったのだと思ひこんでいたから。

ウ 「お祖母ちゃん」が亡くなったときに、母親から他人に迷惑をかけてはいけないと言われていたのに約束を破って、「ハマヤン」や「ハマバアチャン」を困らせてしまったから。

エ 少しずつ新しい環境にも慣れ、「漁火分校」での学校生活に楽しさを感じ始めていたやさきに、「ハマバアチャン」の死という不幸にみまわれ、心に強い衝撃を受けたから。

問四 ——— 部②「イスが鳴ってリュウジがずっとこけている」とあるが、「リュウジ」が「ずっとこけ」たのはなぜだと考えられるか、説明しなさい。

問五 ——— 部③「それらの不可解だったちいさな謎が、いま校長センセの話を聞いて、きれいさっぱり解きほぐれたのだった」について、

(1) 「それらの不可解だったちいさな謎」とはどういう「謎」か、その内容を説明しなさい。

(2) 「解きほぐれた」のはどういうことが分かったからか、説明しなさい。

— 11 —

問六 ——— 部④「カナエが校長センセのことばに静かにうなずき、阿波のいただきさん」の資料

写真をちいさくたたみ、胸のポケットにしよせた」とあるが、この時の「カナエ」の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 周りからしたわれた「ハマバアチャン」のことを大切に思い続けようという決意。

イ 「校長センセ」のことばを信じて「漁火魂」をみんなに伝えていこうという決心。

ウ 大人になったら自分もこの土地で「阿波のいただきさん」になりたいという望み。

エ 「父」や「母」にも「漁火」のことをよく知って好きになってほしいという願い。

問七 ——— 部⑤「ドコイッタ」、⑥「ポチポチ」、⑦「ハナシガイ」はそれぞれ何という生きものか、答えなさい。

問八 ☐ 部2にはどんなことばが入るか、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

い。

ア お母さんに何て言おう……

イ もうおそいよ、今さら……

ウ わあ、まるで宝箱みたいだ！

エ 記念にのこしておくんだもん！

問九 ☐ 部3にはどんなことばが入るか、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

い。

ア じつくりと

イ しっかりと

ウ ゆったりと

エ しんみりと

問十 ——— 部⑧「カナエは、うなずき、うなずき、涙のイカそうめんをすすった」とあるが、この時の「カナエ」はどういう気持ちなのか、説明しなさい。

— 12 —

三 例にならって、次の①～⑤の二つの漢字に同じ部首をつけ、意味の通る熟語にして答えなさい。

例 幾 戒 ↓ 機械

- ① 早 化 ② 各 至 ③ 市 未 ④ 垂 音 ⑤ 申 土

四 次の①～⑤の語の正しい数え方をそれぞれ後の中から選び、記号で答えなさい。

- ① い か ② 魚 ③ う さ ぎ ④ キ ャ ベ ッ ⑤ と う ふ

ア 一玉、二玉…… イ 一丁、二丁…… ウ 一面、二面……
エ 一杯、二杯…… オ 一羽、二羽…… カ 一尾、二尾……

五 次の①～④の文字が入ったことわざを答えなさい。またそれらのことわざの中で、後の意味にあてはまるものを一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 所 品 ② 楽 苦 ③ 雨 地 ④ 背 腹

意味 大切なものを守るためには、他のものを失っても仕方がないということ。

(前期)

や「かぎかつこ」なども、一字として数えます。

ア

1

7

1

X

1

1

--	--

--	--

1

--	--

①

①

③

11

1

1

--	--